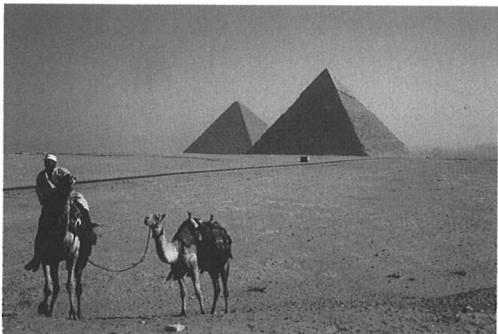


砂塵とエジプト古代文明(1)

春 松 安 司

サブリ君が、「今日こそエジプトを案内しますよ。」と、言ってくれた。

林先生（医者）は、待ってましたとばかりに、準備に取りかかった。3日間の短い旅行に3人で行こうということに相成った。



荒涼たる砂漠とギザの三大ピラミッド

なにか、3馬鹿トリオ的な雰囲気が漂う奇妙な組合せである。地質屋と医師と現地通訳の組合せであるが、林先生は、「俺は医者だが、君は石屋だろう。マア似たような人種だ。」と、いとも簡単に、医師と地質屋（石屋）を結び付けてしまった。

エジプトに来て、早や、15日位がたとうとしていた。毎日、毎日、砂塵の中で、ただあくせく調査するのに少々、いや、かな

り疲れていた。

ナイル川の上流であるルクソールの街から、さらに、約40分飛行機で南下すると、アスワンの街がある。昔、アスワンハイダムの話を学校で習った記憶がある。たしか、ソ連（現ロシア共和国）の援助で完成したダムであると習った。そのアスワンハイダムに案内してくれると言う。

ルクソール空港で待つこと2時間。クーラーもない空港で、ボーッとしているのも飽きてきた。

「飛行機は、まだ飛ばないの？」

サブリ君は、訳のわからないアラビヤ文字で書かれた本を、領きながら読んでいる。

「エジプトでは、時間通りに飛ばない事が多いんですよ。」

「エーッ、それじゃ何時飛ぶのかわからないの？」

啞然として、林先生の顔を窺うと、これまた真面目な顔をして専門書（今度は、ドイツ語か？）に目を通している。

79歳になるというのに、かくしゃく豊饒としている

る。かつて軍医だったらしく姿勢が非常に良い。

「専門は何ですか？」

「この年になるとだな、マア全部だな。すべての事がわからないといけないんだよ。」

そういうえば、5日位前に風邪をひいて先生のお世話になった。その時は、きちんと、日本の医師が処方するような薬を頂いた。でも、その2日後に女子学生がお腹が痛いと言って先生の所に来たとき、風邪薬だと私がもらったのと、全く同じ薬を彼女に渡していた。

一瞬、驚いたが、先生の言うには、「もう、薬はない。なんでも薬だと思って飲むと直るんだ。」と、自信たっぷりに宣っていたのを思い出した。

この藪医者め。でも、俺も、ヤブ石屋かもしれないな。

「私の仲間は、皆、早死にした。そいつらは、タバコも吸わないし、酒も自分でセーブしながら飲んでいた。なんでも、体に悪いと思って生活していると、必ず、病気になる。長生きの秘訣は、暴飲暴食に限る。」

と、妙な理屈を宣う変な医師だった。

「ようやく、飛ぶみたいですよ。」

サブリ君の落ち着いた声が聞こえてきた。

「飛行機の座席は、自由席ですから好きな所に座って下さい。」

「エーッ、自由席？」

すべてが、日本の常識とかけ離れていた。否、これがこの国の常識なのだ。

離陸とともに、機内の中が砂塵で濛々としてきた。すぐに、寝たふりを決め込んだ。

「これが、この国の常識なのだ」と、言い聞かせるのが精一杯だった。

着陸と同時に、酸素マスクが一斉にぶら下がってきた。

スチュワーデスは、平然としていた。

「これは、いつもの事なのだ！」

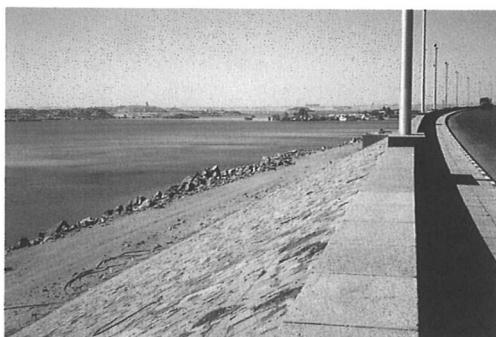
アスワンハイダムが、近づいてくると、なぜかソワソワしてきた。ダムの仕事に携わって23年に成ろうとしている自分にとって、やはり、アスワンハイダムは、別格であった。

「ダムの高さは111m、ダムの長さは約3.3kmあります。ダム湖の名前は、ナセル湖といいます。湖の長さは、約500kmあります。この湖ができたため、上流のアブシンペルという街にあった貴重な神殿は、世界遺産として保存する為に、世界各国からプロポーザルを受け、最終的には、ス

ウェーデンの案が採用され、数万個のピースに分割された上で、それを、湖の影響のない高台に移転する事になったのです。今日、後で、そのアブシンベルに行きます。」

「これは、海だ。湖じゃない。」サブリ君の説明は、そこそこに聞いて、ダムの上下流面の地形・地質状況の観察に時間を費やす事にした。

湖は、満々と紺碧の水を湛えていたが、貯水池周辺の、殆ど地殻変動を受けていない水平な石灰岩の淡い黄褐色の色とは、天と地ほどの差があり、このダムの存在自体が異質であった。



紺碧の水を湛えるアスワンハイダム

そう言えば、カイロに着いて、ギザのピラミッドを見学した時、この古代文明の遺産は、とにかく異質だと感じ入った。

ピラミッドの中は、とても鋭利なカッターで切り出した様なシャープな花崗岩で、ピッタリと隙間のない位に、積みあげて壁

を作ってあり、天井も完全に隙間なく仕上げてあった。

カイロ市内から車で30分も行くと、郊外には、現地人の家がある。彼らは、日干し煉瓦で壁を作っているが、如何せん、屋根を作る事を知らない。

屋根は、日干し煉瓦で積み上げた壁の頂部のコーナーに、椰子の葉を被せてそれで完璧だと言う風に建てられていた。

マア、1年に3~4日しか雨が降らないので、それで良いのかも知れないが、この古代文明のあまりにも緻密で精巧な構造物を作ったのが、今住んでいるエジプト人の先祖とは、およそ信じられなかった。異質であった。

エジプトは、96%が砂漠だという。でも、かつては、やはり、水があったと考えられる。

というのは、今回、砂漠の中で湖成堆積物（白色のかなり脆いシルト岩であるが、草の繊維が残っている。）を発見し、かつて、湖かオアシスがあった事を物語っていた。

それにしても暑い。

サブリ君は、「今、日本と同じく冬ですから、少し寒いです。」

と言う。

昼間、30℃あって、どこが冬なものか。

でも、夜は、確かに5℃前後にまで気温が下がり、かなり寒く感じた。

かつて名古屋大学の地質の諫訪兼位先生が、アフリカをこよなく愛し、スーダンで読まれた和歌を思い出した。

「スーダンに三つの季節ありというホット・ホッター・ホッテスト」

いずれにせよ、この国は、暑いのだ。

アスワンハイダムから、アスワンの街へ戻り、花崗岩の石切り場に案内してくれると言う。

ギザのピラミッドの化粧石や各地に点在するオベリスク等は、このアスワンの花崗岩の石切り場から切り出され、建造されたとの事である。

花崗岩は、片麻状を呈し、かなり堅硬・緻密であり、節理が殆ど無い。やはり、土木地質的な見方をしてしまった。

「日本のダム基礎岩盤だったら、超A級岩盤だ。」

サブリ君が、切りかけのオベリスクの前で、花崗岩の切り出し方法について説明してくれた。

「石の目に沿って穴を開け、そこに木の

楔を打ち込みます。そして、水をかけて膨張力で石を割ります。」

「ここでいう石の目とは、どこなのか？ 節理は無い。極めて塊状である。あるのは、一定方向の片麻状構造しか無い。それも、ハンマーでは、絶対に割れない位に硬い。やはり、この国の先祖は、普通の人間ではない。誰だ。誰がそんな技術を教えたのか？」

と、自問自答しながら茫然と立ち尽くしていた。

林先生が、「サブリ君、この切り出した石をどうやって運んだんだろう？」と困らせる様な質問を投げかけた。

「昔は、今みたいな機械はないので、すべて人間の手で運んだのです。」

「人間の手？まさか。1,000人集まつても絶対に持ち上げる事はできないぞ。」

「木で作った、コロや橇で運んだと聞いています。でも、その使用したコロは、発見されていません。」

良く耳にする運搬方法であるが、この国には、木は無い。あるのは椰子の木しか無い。また、コロや橇が発見されていないと言う事は、本当かどうかわからない。日本と違って木造の建造物は、全く存在しない。当然の事ながら木が無いからだ。

しかし、この硬い花崗岩を良く切り出したものだ。それも極めて精密に切り出している。

サブリ君を困らせるのは止める事にして、アスワン空港から、またまた自由席の飛行機に乗り、さらに南の、アブシンベルへ向かった。

暑い！より暑い！最も暑い！（ホット！ホッター！ホッテスト！）

なによりも、砂塵には閉口した。空港周辺は砂漠の砂が舞い上がっており、黄砂みたいな（見た事はないが）、空気の色と匂いが漂っていた。

しばらく歩き、粗粒な赤色砂岩が、水平に堆積している小高い丘をぐるりと回ると、そこに、またまた異様な巨大建造物が視野に入ってきた。

「これが、かの有名なアブシンベル神殿です。先ほど説明しました様に、ダムが建造されたので、この位置に移設されたものです。」

周りには、赤色砂岩が白く（？）映えている。白いのは、砂塵のせいだ。こんな辺境の地に誰が建造したのか？不思議でならない。

「この神殿は、ラムセス2世が自分と妃

のために造らせた神殿です。彼は、とても妃を愛していました。」

知るか、そんな事！しかし、この神殿をこの位置まで移設した現在の人間の技術もすばらしい。でも良く観察すると、ピラミッドの様には精密に積み上げられてはいない。やはり、昔の人間の方がすばらしい技術を有していたとしか考えられない。

それにしても、不可思議な人類が、居たもんだ。

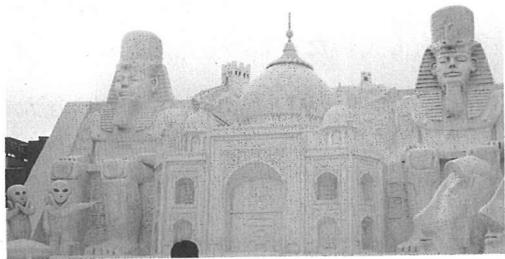


アブシンベル神殿

——今年2月、札幌の雪祭りでこのアブシンベル神殿の雪像が造られていた。でも、かなり大掛かりな機械を駆使しての建造であり、この高さ20m、30×35mの幅で、詳細なレリーフが彫られた神殿とは雲泥の差があった。なによりも硬さが違う。——

——札幌のアブシンベル神殿の雪像の隣には、モアイ像とともに、UFOと宇宙人の雪像が造られていた。——

——この雪像の建造を企画した人は、このアブシンベル神殿を訪れた人だろう。そう思いたくなる。やはり、異質すぎる。UFOと宇宙人！なるほど、そうかも知れない。——



札幌雪祭りのアブシンベル神殿
(左側にUFOと宇宙人)

アブシンベルの冬は、静寂感が漂い、異質で、自然と非調和的な、黄色みがかった世界だった。札幌は、人の匂いが漂い、自然と調和的な、ダイヤモンドダストが舞う銀世界だった。

(日本工営㈱)

